
先生、あなたのおかげで私の周りは騒動が絶えません

那雲

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先生、あなたのおかげで私の周りは騒動が絶えません

【Zコード】

N20730

【作者名】

那雲

【あらすじ】

先生の頼み「」と（＝厄介事をおしつけられただけ）に振り回される生徒の話。

四月。暮坂高校に通うことになつた私こと、盾崎真白は、桜並木を眺めながら始まる高校生活に思いを馳せていた。

そう、奴の出現によつて。

卷之三

今のは聞かなかつたことに。

この話は、私が体験した、奴の横暴による苦労記です。はい。みなさん、どうか私の苦労を読

痛つ
たい
！！

げ、
い つ の 間 に。

頭を押さえて振り返つたら、手に出席簿を持ちうすら寒い笑顔を浮かべた奴がいました。

首を軽く傾げて何書いてるのかな？ って言つてます。
言つつけないでや。 言つこら段三八

奴つて誰かつて？

それは奴です。奴は奴以下でもそれ以上でもありません。

あーでも、詳しく言うなら奴っていうのは私のクラスの担任である
楯茉奏空たてまおそうく、腹黒男はらくろおのことですよーーー！

つて、痛いーーー！

……また叩かれた。

ていうか。

「内容見えてんでしょうーーー！」

腹黒のくせに、美形で性別問わずに生徒に人気あるから余計に腹が立つーーー！

……みんなこの人の本性を知るべきだよ、ほんと。

あ、もうなんか先生の顔が臨界点りんかいぎりぎりのところまできたって顔してるから、今は部室ぶしつに行きます。

……じゃあ、生きてたらまた後で。

序記（後書き）

更新不定期ですので
^__(ーー)^_よろしくお願ひします

先生の頼みごと 不登校児の説得（1）

先生の頼みごと（随分美化された言い方だけ）は、生徒の自分としてはなるべくなら聞かなければいけない。

まあ、たいていのことなら。

でも、うちの担任に限っては、そんじょそこらの先生とは違つて、頼む内容がおかしなことばかりだ。

明らかに先生がしなきやいけない仕事であるはずなのに、生徒の私にそれを押しつけているのだ。

何たる職務怠慢！！

まあ、もじ自分が教師だったとしたら、先生と同じように遠慮したい内容ではあるけどね！ だって、何より平穏無事が一番だし。でもね、先生の「頼みごと」によつて、私の日常はそつはいかない。まあ、先生の日常は平穏無事であつてもね。

まあ。まったく、未来を思うと気が重いよ。

だって、これから、学校一の問題児と言われる金城燈夜のところに行かなくちゃならないしね。先生の頼みごとのせいで。なんか金城燈夜は不登校続きで、出席日数が危ういんだつてさ。それで学校へ来るよう、説得役を任せられたんだよね、先生から。

金城燈夜は教師に暴力を振るうほど手をつけられない人物だって聞くから、もう本当に気が重いよ。

まあ、一応説得役を任せられたんだし、試みるつもりではあるけどね。でもね、無理な感じだったら、先生に言つつもりだけだ。

だって、元々こういうのは先生の仕事だしね。ていうか、説得する以前に、本人がどこにいるのかわからないもんで、捜さなきやならないんですけどね。

今放課後なんだけど、家にも帰つてないらしいし。

先生の情報によると。

あ、今ちなみに昨日田撃情報のあつた河原の側を歩いてるんだけど。

これも先生からの情報。

金城燈夜の姿は、うーん、見当たらない……。

この河の上、橋が通つてゐるんだけど、もしかして、漫画みたいに橋の下で喧嘩してましたー……っていう状況じゃあないよね、そんな漫画みたいな話があるわけないよねー、だよねー、ないよねー……。

とか思いながら土手を降りたんだけどね。

うん、え?

まさかと思ってたらなんか本当に、橋の下で何か声が聞こえるんですけど?

なんか遠くで怒声とか罵声が飛び交つてるように聞こえるんですけど。

え、空耳? 空耳だよね?

あはははー。

首をゆつくりと声が聞こえる方向へ動かしたら、狗城南高校の数人の生徒に囲まれた、うちの制服を着た生徒が見えた。

おおー。

あれがもしかして噂の金城燈夜?

先生からもらつた容姿の情報と合致するのはするなー。

お、人數的には不利な感じだけど、金城燈夜頑張つてゐなあ。南高

なんじゅう

の奴らに遅れをとつてないし。

やるなあー。やっぱり腕つ節強いんだなあ。

とか感心してみてたんだけど。

なんか、南高の一人が私に気付いたようで、意地悪気な笑みを浮かべてこっちにやって来るんですが。

あー、金城燈夜に負けそんなんで、私を利用して彼の動きを止めようつてわけですか。

全く、考えることがセロイ。

すでに正々堂々、対等じゃないってのに、それでもまだ卑怯な手を使おうとするって、私としてはどうかと思うんだけどなあ。

あー、後三メートルくらいで南高の奴が私の前に来るなあ。

そういうや、今日何の教科書入つてたっけ…。

ああ、現代文に、数学に物理に、英語に、その他諸々教科書入つて今日の鞄、それなりに重いんだよね…。

そんなことを考えながら両手で鞄を強く握り直す。

そして、鞄の重さを利用し回転、遠心力を使いながら、鞄を近づいてくる南高の男の顎を思い切り殴りつけた。

「ぐはつ！」

南高の男が声を上げて倒れ、地面に伸びた。

おー、やつた、成功、成功。

顔を上げて、金城燈夜たちの方を見ると、私がそんなことをしていた間に既に南高の奴らの人数は半分以下に減つていた。

現在は、突然の事態にみなさん、動きを止めていらっしゃいますので人数に変化はないです。

そりやあ、突然見ず知らずの人間に喧嘩邪魔されたら、誰でも驚くよね。

さて、どうしよう。

ていうか、私、どうなる？

場合によつては、金城燈夜より私が倒す相手の優先対象になつたりして……。

……あ、えーと今度の予想は裏切られました。

半分に別れちゃいました。四人だったので、一人ずつに。

金城燈夜に背を向けて二人の男がこつちに歩いてくる。

彼らの肩越しに金城燈夜が、自分に襲いかかってくる男たちを殴り飛ばしているのが見える。

おーなんか、瞬殺？　いや、秒殺？　金城燈夜少し怪我してるみたいだけど、あの人数であれだけの怪我だけって、本当に強いなあ。また、余計なこと考えてたら南高の奴らもうほとんど目の前だ。でも、この感じだと

「おい、お前ら！－」

金城燈夜の怒声と共に、辺りに鈍い殴打音が響く。

「てめえ、やりやがったな！」

南高最後の一人が、金城燈夜へと殴りかかる。

しかし、懐に潜り込んだ金城燈夜にあっさりと倒され、氣絶する。

「おい、お前」

荒い息を吐き出しながら、金城燈夜が私を睨みつけた。

「こんなところで何してる」

金城燈夜が私を睨みつけてくる。

私は当然のよう答えた。

「あなたを学校に来るよう説得しにきたの」

先生の頼みじとー 不登校児の説得（ー）（後書き）

なんというか、作者が書きたいように書いてるので、わざわざ読んでほしいです。

難しいことは考えないで。軽く読める感じで書いてるつもりです

更新は不定期なので、宜しくお願ひします (*・・・) * — —
ペコリ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2073o/>

先生、あなたのおかげで私の周りは騒動が絶えません

2010年10月15日12時31分発行